

正式なトレーニング

安全衛生庁は、十分なトレーニングは石綿の危険を最小限にするために重要であると、はっきりと認識している。よって安全衛生庁は、石綿の危険について討論するトレーニングビデオなど、様々なガイダンス材料を提供する。トレーニングは、過去に石綿を用いて仕事をしたことがある人々にとっても大切である。彼らは受けたトレーニングを部分的に忘れ、または新しくより安全な作業法に気がつかずにいる可能性が高いからである。従業員たちは雇用者にトレーニングを準備してもらうべきである。しかし個人業者たちは自分でトレーニングを手配しなければならない。

回答者が正式なトレーニングを受けたことがあると報告した場合は、そのトレーニングは短く特定のなもので、しばしば職場を通じて行われたものであった。主に中規模から大規模の組織にみられたが、ごくわずかな場合において、雇用者が毎年のリフレッシュコースと周期的なリマインダーを用いて、石綿に対する認識を高めるための活動的なキャンペーンを行った。作業員たちの一人はその職場の労働組合の代表（NHS）であり、石綿をめぐる認識の促進に積極的に関わっていた。病院では月刊のスタッフニュースレターを発行していたが、それは石綿の危険に対する認識の促進を助けるために用いられ、また良い習慣に注目した。しかしながら、このレベルの石綿に対する意識向上のための関与や経験はまれである。

正式なトレーニングを受けたことが無い人々が、しばしば詳細な知識を欠いていたにも関わらず、石綿の話題に関して自分がよく知っている、と強い自信を持っている場合が多かったことは興味深い発見であった。それとは対照的に、正式な見習い期間中の個人や最近トレーニングを経験した人は自分たちの知識のレベルについてより自信がなさそうであった。これは、石綿に関するトレーニングを欠く個々の人々が、石綿を見分けたり扱ったりするのは簡単である、またはその問題は自分には重要なことではないと誤って思い込んでいるだけで、単に「知らぬが仏」ということだったのかもしれない。何らかの形のトレーニングを受けた人は、それとは対照的に、自分たちの知識は断片的であり、その問題は複雑かもしれないという認識を持っていた。

回答者のうち何人かは、特に異なるタイプの石綿に関する技術的情報の断片を紹介したが、その回答は混乱していたようであったし、自分はよく知らない資料文献の中の情報を引合いに出したりした。このグループの人々はコースに参加したり資料を読んだりしたりしたが、詳細は覚えていなかったということが考えられる。このことはトレーニングの授業外で利用でき、または安全な行為を構成するものの詳細を取得するのに利用できる参考資料を供給することの大切さを強調する。

非公式な情報源

少数の個人たちはいかにしてオンラインリサーチを行い、地域の議会や安全衛生庁（HSE）に問い合わせ自分で情報集めを行ったかということ報告した。自分で石綿に関する情報を追求した人々は、それは容易な作業ではなく、石綿に関する有用な情報を見つけるのは骨の折れる作業であり得るということの特に付け加えた。

「私は石綿についての情報を探し続けてきたつもりです。ある日あるウェブサイトを訪ね、一生懸命調べたことを覚えてますが、既存の情報には少々がっかりしましたよ。(……)石綿がどんな風に見えるのかを調べるためにそのウェブサイトを見ているんだか何だかわからなかった。私はウェブサーフィン結構得意です。それまでも何年もやってましたからね。でも石綿がどんな風に見えるのか一生懸命見ようとしたのですが、絵がひどく小さい上に質が低かったんです。」

電気工、31歳、個人業者、住居建築物取り扱い

少数の、しかしかなりの数の回答者は石綿に関するトレーニングを受けたことを思い出すことすらできなかった。それは特により年配の作業員、または見習い期間を経なかった人に見られることであった。正式なトレーニング無しの場合、労働者たちは、その石綿関係の問題に対する知識や認識は、職場や同僚、メディア、そして家族や友人から得た情報を基にしていた。非公式な情報網やメディアを通して得られるメッセージの質は様々ではなかったが、かつて石綿が危険なものだとは考えたことの無かった人には認識が高まるという結果になった場合もあった。

「たぶん私はこの(石綿の)粉じんにさらされたと思いますよ。かなり最近になるまでアルテックスの中の石綿繊維がどんなものか知りませんでしたからね。それに、友人、別の友人であり同僚ですけど、彼が自分の通っていたコースのことを教えてくれるまで、私たちは石綿製品が周囲にどの程度あるのかほとんど気がつかなかったんです。波型屋根とかそんなものに入っているということは知ってましたけどね。」

その他のメンテナンス、48歳、大会社の被雇用者、住居建築物取り扱い

2.1.2 会社の規模とトレーニングのレベル

本インタビューにおける一貫した一つの主題は、個人業者の労働習慣と規模のより大きい会社のそれとの差異である。この違いはトレーニングへのアクセスの違いと提供されるトレーニングのレベルの違いである程度説明できる。何人かの労働者たちはその分野に入るために正式な見習い期間を経、したがって他の人よりも多くトレーニングを経験していたのである。ただし、そのうち何人かはトレーニングを受けたのは大分前のことであった。また全体的に言って、トレーニングのアップデートは一般的にはより大きな会社、またはより大きな現場で働く人々に限られているということが認められた。小規模の会社では、価格のみで仕事を求めて競争しなければならない時に、従業員のトレーニング費用を正当化するのが困難であると感じられた。したがって小規模な会社に勤める人々、個人経営者、この業界に正式な見習い期間無しで入った人々は、広範な諸問題に関する最近の情報に不足しているために、最も危険性にさらされているようであり、石綿はそのような問題の一つである。

「健康安全(局)では小規模な会社に援助してくれないんです。だからうちの連中が(トレーニングに)行くとしたら、うちの会社が払わなくちゃならない。それと時間の要素も

ある。私がコースの費用と彼らの給料を払わなくちゃならない。それに多い時で一度にほとんど皆1週間いなくなってしまう。それじゃ役に立たない。それだからこのごろ違法な会社が多いんですよ。・・・連中がやることと言ったら、より安い仕事をして他を負かすんです。私は値段で仕事を取るし、うちの連中はみんな資格を持っているんです。あの近所のやつのは4人くらいいるかな。彼らは臨時で仕事していて、健康安全どころじゃない。だから他より安くして他を負かすんですよ。それも大きい会社のせいですよ。一番安いやつが仕事を取るんです。彼らはそんなこと調べないですからね。会社の背景なんて・・・」

その他のメンテナンス、59歳、SME 被雇用者、非住居建築物取り扱い

2.2 トレーニングから得たメッセージ

個々の人々が受けたトレーニングおよび情報検索、または情報共有の結果、はっきりとしたメッセージがメンテナンス作業員たちに浸透した。

2.2.1 「ショック戦略」のトレーニングでの利用

正式なトレーニングにおけるメッセージには非常に強いものがあつた。何人かの労働者はそのトレーニングの一環として見たビデオについて言及した。そのビデオは石綿の肺への影響の映像を含んでおり、見たものに強烈な印象を残したのだ。視聴者の中にはこのビデオは特に見るのが困難で、動揺してしまつたと言う人が多かつた。それはこのビデオにより過去に請け負つた作業について再び考えさせられ、それによりもうすでに受けてしまつたかもしれないダメージのことが不安になつたからである。しかしながら、このようなショック戦略の使用には、これから建設関係の仕事に就くことを考えている若い人々を遠のけてしまうかもしれないという懸念の声があつた。しかしショック戦略は、若い人々が健康問題に関心を持つようになるために有用であり得るということは認められた。

「一番大事なメッセージは、ビデオが人の肺などを見せているときだ。あれが一番大事なのです。あれは本当に記憶に残つた。こんなこと言つたって、私にとっては今となつては少々遅いけど、みんなあれは忘れられない。」

その他のメンテナンス、69歳？、大規模会社の従業員、非住居建築取り扱い

「5年位前、石綿の害についてのコースがあつて、みんな恐怖で凍りついてしまつた。みんな死にそうだった、それに・・・ほとんどのメンテナンスの連中は石綿を使ったことがあるんですよ。石綿そのものだけでなく、石綿の入つた物も。」

その他のメンテナンス、47歳、大規模会社の従業員、非住居建築取り扱い

2.2.2 石綿は「危険である」

したがってトレーニングを受けている回答者が学んだメッセージは、石綿は非常に危険であり、

石綿除去の専門家によってのみ扱われるべきであるということである。

多くの労働者は、トレーニング時に石綿を含む可能性の高い商品や材料の幅広いバラエティーについての情報に驚愕した。彼らはまた、トレーニング中に伝えられる全ての情報を覚えているのは難しいと言い、何人かの作業者はさらに詳しい情報が必要な場合は入手可能な文献資料について言及した。しかし、さらに少数の人々は、石綿の見分け方や接触や曝露を回避できない場合にとるべき処置を含む、トレーニングで学んだより詳細なメッセージについて語る事ができた。

「トレーニングからはあんまり覚えていません。でも大きな冊子をもらいましたよ。これには何千もの石綿が入った製品が網羅されているんです。あんまりたくさんのもに石綿が入っているので、びっくりしましたよ。便座にまではいつているんですからね。」

塗装工/装飾工、59歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「触ったりしませんよ。触ったりしない。触るとしても、たとえ健康安全の理由で取り除かなくちゃいけないとしても、顔用のマスクをして（石綿よけの）スーツを着ますよ。そして後ですぐにシャワーで流します。特に何色をしているかにもよりますがね。でも十中八九触らない。近寄りもしませんし、もし家の中に入りそれがあるのを見て、危険である可能性があると思ったら、ボスにその建物を閉鎖するようにアドバイスしますよ。特にその除去中にはね。私は、危険は絶対冒さないです、そんな価値無いです。自分だけの命じゃないですからね。もし小さい子供でもいたらねえ、わかるでしょう。」

その他のメンテナンス、38歳、SME従業員、非住居建築物取り扱い

2.2.3 漠然とした不安、しかし特定な知識のなさ

ショック戦略がいくらかの価値があると認められている一方、インタビューを受けた人々の意見から、建設業で働く人の中には自分や現場のほかの人達を守るための、適切なトレーニングを受けていない人がいることが明らかであった。自分が正しいトレーニングを受けたことがあるとは思えないと言う事実を確認する人々もがいたが、自分の同僚たち（雇用者やパートナー、またそのほか現場で共に作業をしなければならない人々）がこの問題について不十分な知識しかもっていないという事実について述べた人もいた。実用的なアドバイスとトレーニングの欠如は、その結果として石綿曝露の危険性に自らをさらす労働者がいるような状況を招きかねない。

このことは、多くの作業者たちが非常に一般的な意味で石綿の危険性に気づいてはいたものの、これらの危険の程度や自分たちを守るために何ができるのかということについてははっきりとわかっていない可能性があると言うことを示す。何人かの回答者たちは特別な知識と結びついた漠然とした不安をあらわにした。

特別な知識の欠如は、労働者のリスクを二通りに増加させる。一つは現場で石綿を見分けるために

必要な能力を持たないことにより、二つは、与えられた石綿関係の状況において従うべき特定の手順を知らないことによる。したがって、全体的に、トレーニングの主なインパクトは、それが石綿のリスクに対する認識を高めるということである。しかし、これらのリスクに対してすべきことに関する詳しい援助的情報無しには、労働者たちは潜在的に被害を受けやすく、心理的に心地の悪い立場に取り残されてしまう。

2.3 相反するメッセージと誤った情報

作業員たちの多くは（トレーニングを受けたことがあるものも受けたことの無いものも）、石綿に関して入り混じったメッセージに出遭ったことがある。異なる業種、異なる材料、または労働習慣に伴う関連のリスクについて、混乱がみられることがしばしばあった。

2.3.1 相反するメッセージと誤った情報

作業員たちが（このことは全ての業種に当てはまることだが）自分たちの業種は他の業種よりも、そして実際よりも、曝露のリスクが少ないと信じるようになった例がいくつかあった（メンテナンス業界の全ての作業員は石綿曝露の危険に瀕している。さらに詳しくは第1章を参照のこと）。トレーニングの内容が石綿について、特に材料と接触することに伴う健康上の危険についての意識を向上させるらしい一方、作業員たちはこの危険と自分たちの作業活動を結び付けなかった。

多くの作業員たちは、石綿は禁止され、もはや建築や建設に用いられる材料ではないので、危険を引き起こすことはもう無いという印象を持っていた。いくつかの場合においては、正式なトレーニングを受け、上記の広い意味での石綿についての平均的認識レベルを持ちながらもそうなのであった。

「石綿はもう作られていないのですから、今は基本的にはもう危険ではないですよ。あなたが言っているのは60年代に石綿が建材であったことのことであって、それだけのことですよ。」

大工/指物師、56歳、SME 従業員、住居建築物取り扱い

概して、作業員たちは自分たちが受けた、相反するメッセージに戸惑いを感じていた。情報を積極的に追求した人々、または概してよく知っているように見えた人々も、はっきりとした答えを見つけるのは難しいと感じていた：

「とにかく石綿というのは悪い知らせだ。しかし、青石綿と茶石綿、茶色でしたよね、この二つはしばらく使われていない、この人達によればね。つまりそれが問題なんですよ。一人の人に一つの事を尋ねても、今度は別の人がそれと全く違うことを教えてくれるんですよ。こんな多くの問題について、本当にバランスのとれた見解を見出すのはひどく難しいです。」

その他のメンテナンス、48歳、大企業の従業員、住居建築物取り扱い

ここでの主要な発見は、異なる情報源は石綿について異なる情報を供給し、自分が何を必要があるのかということを作業者たちが理解するに際して、混乱と困難をもたらすということである。

2.3.2 異なる材料に関する混乱

全体的に見て、石綿を含む材料の種類について、そしてどれが危険でどれが危険ではないかということについて相当の混乱があった。例えば、アルテックス、”マーレィタイル“、および波形セメントシートの相対的安全について相反する見解があった。これらの製品は作業者たちが最も頻繁に接触するものであったので、この議論は重要である。それぞれのタイプの石綿含有製品に関連した相対的危険性（つまり、あるものは他のものよりより深刻なリスクを引き起こす。さらに詳しくは第1章を参照のこと）を理解できる作業者がいた一方、より単純なメッセージ、「石綿は全て危険」というメッセージを受けた作業者もいた。

石綿含有材料をめぐる不審な作業習慣を引用した人もいたが、それでもそれまでに得たアドバイスに基づいて適切な予防措置をしていると思っているようであった。そのことは、現在の習慣は必ず最新の情報により導かれているのだろうか、という疑問を引き起こす。いくつかの例においてはそうではなかった。

「私が理解するところでは、アルテックスが扱うのが危険な製品なのか否かということに関して大議論がある。また床に可塑性プラスチックタイル（マーレィタイルとほとんどに人々が呼ぶが）がある場合、それに含まれる石綿繊維はほんの3-5パーセントだと彼らは考えるようだ。そのものはある種のプラスチックの中に含まれている。

これは挽いて小さな粒にくだかなくちゃ変わらない。しかし、一部屋そっくり取り出して、ちりが舞っているようなら、それは明らかに危険な可能性がありますよ。」

その他のメンテナンス、48歳、大企業の従業員、住居建築物取り扱い

2.3.3 石綿の識別—キャッチ22の状況

もし多くの作業者たちが全ての石綿は危険であるという単純なメッセージだけで作業をしているなら、その限られた情報を彼らの日々の仕事において彼らを助けるためにいかにして用いているのか、という疑問が起こる。石綿に関するより詳細な意識や知識の欠如は、多くの人にとって「キャッチ22」の状態をつくりだしてしまう。作業者たちは石綿を用いた仕事をしてはいけない（または、何の用心もなしにそうしてはいけない）ということは知っているが、石綿含有材料を、自信を持って同定するために必要な技術を身に付けてはいない。よってかれらにとって自分自身や同僚の健康を守るのは非常に難しいことにもなり得る。この「キャッチ22」状態（つまり、本当にあるのかどうかわからないものから身を守ることができない状態）はインタビューの間、トレーニングを受

けたことのある人とも無い人ともしばしば話し合われた。識別は主要な問題であり、トレーニングがもっと強調できるものである。

「彼ら（会社）が被覆材の会社を呼んで、ただいろいろな石綿のかけらを見せて、これは白、これは青、と言ったりしました。茶色は全然見せてくれませんでした、一番危ないものってことになっていきますがね。それもかなりずっと前のことで、アップデートしてもらってない。困るのは、つまり、見せてくれるのはいいのですが、現場ではプラスターボード見て、それが石綿だってどうやってわかりますかね？実際、識別がたぶん一番難しいところですよ。」

電気工、43歳、大企業の従業員、住居建築物取り扱い

石綿を含む材料のタイプについての説明はかなり漠然としている傾向があり、このような材料を見分ける自分たちの能力について自信の無い作業者も何人かいた。このことは特に、非常に実際石綿を含む多くの製品のことを認識している労働者について当てはまることであった。それとは対照的に、多くの作業者たち（トレーニングを受けた人も受けていない人も）は石綿というものの幅の狭い商品や材料しか思い出せない。より年配の作業者たちは、今日何が安全な行為であるかということを決定する際に、かつてのキャリアにおける、石綿を用いた仕事の知識やこれらの特定の材料（被覆材関係の例がいくつかあったが）を用いた経験に頼る傾向がある。たった数人の労働者だけが、自分の石綿識別力に自信を感じていた。

「私が識別の仕方を知っている石綿の形態の唯一のものは波形シートで、石綿タイプのもので。さっきもお話したように、アルテックスを使う人たちは、かつては石綿入りのアルテックスを使っていたことも知っていますよ。それ以外は、私には見分けがつけられないです。だからもしそれ（石綿）に接触することがあっても、自分がその危険にさらされているかどうかはわかりません。」

塗装工/装飾工、33歳、個人業者、住居建築物取り扱い

2.3.4 石綿の取り扱い方に対する自信の欠如

全ての作業者は石綿に関してどのくらい自信があるかについて述べるように依頼された。反応は複雑であった。とても自信があると答えた人でも、非常に簡単な回答しかできなかった。その一方で、あまり自信が無いと感じた人達は、さらに詳細について語り、自分たちの知識の欠如を弁明しようとしたり、いかに様々な問題についてもっとよく知りたいか、ということについて語ったりした。ほとんどの人が石綿についてせめて一般的な表現で知ることが、肝心であると考えていた。自分はこの課題についてほとんど知らないと思っている人たちでも、石綿の一般的な危険性については理解していた。

「体に悪いことは知っていますが、あまりよく知りません。それ（石綿）に接することは結構ありますよ。一ヶ月前、いや違う、いや、やっぱり一ヶ月前だったよ、ある家で仕事していたんですが、その家は古いわゆる戦時中のプレハブの建物で、壁が全部石綿な

んです。ラジエーターを取り付けるため、ドリルで穴をあけたりしなければならなかった。だからドアをあけてマスクをしたんです。でもそれからその家の床下に行かなければならなくて、そこでもマスクはしていましたが、今考えると、そこは石綿だらけだったに違いありませんよ。どのくらいそこにいるにしても、私はマスクはしますが、どんなマスクをすることになっているのかは知りません。」

配管工/ヒーティング技師、22歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「うん、そうだね・・・、これはわかりにくいタイプの、なんて言ったらいいか、物質と言えるね。だからこれにかかわるのは心配だ、わかるでしょ、これを扱うことさえもね。もし扱わなくていいのならしめたものだ、そうでしょ。もしなにか取り壊さなくちゃならないとしたら、僕ならクライアントに、自分で取り除いてくださいと言うがね。彼らにこんなことが起こってから、この3,4年は絶対にそうだよ。だから僕はその危険性は十分知っているんだ、わかるでしょ。そうでなければこれをこんな特別な入れ物に入れておいたりしないでしょ。特別な入れ物に入れさせられたりしない、そうでしょう。」

その他のメンテナンス、61歳、個人業者、住居建築物取り扱い

作業員たちが石綿の識別に自信があったとしても、その場合にとるべき特定の処置についてはあいまいであった。安全衛生庁の手引きには、「もし石綿を含むかもしれないと思われる、隠れた、または埃っぽい材料を見つけたら、作業を停止しアドバイスを得なさい」と述べてある。しかしながら、このアドバイスをどこから得るかということについて明確さが欠けていた。識別や除去のために石綿専門家を雇うことに対しては、さらに心配な点があった。それにはコストインプリケーションがあるからだ（この問題については第3章でより詳しく議論する）。住居での仕事では特に、それぞれの個人は、自分があまり詳しくない問題を扱う場合は「自分一人」と感じる場合が多かった。

「適切な処置について知っている人は多くないと思います。特別なスキップを使わなければ、とか言うのはかまわないです。でももし誰かのキッチンで石綿を見つけて、それを剥ぎ取らなくてはならないとしたら、そんな急に何ができるでしょうか？誰か呼ばなくちゃいけないですかね、それとも・・・。実際には僕たちはこのことについて十分教えてもらってないのです。」

大工/指物師、56歳、SME 従業員、住居建築物取り扱い

自分の石綿に関する全体的な知識レベルにあまり自信が無いと感じた何人もの労働者たちは、その詳細な回答の中でさらに、実は自分は基本的なメッセージについてはよく理解していると打ち明けた。石綿の知識というと、それを含む材料のことではなく、すっかり石綿の種類—青、白、茶色—のことだと思える人たちがいる。

「あんまり・・・、つまり、体に悪いことは知っています。明らかに石綿の粉じんとか何でも肺に入りますからね。でもそれ以外はほとんど教えてもらっていません。それに石綿

にあんまり関ることないから、彼らは教えてくれないんですよ。」

配管工/ヒーティング技師、23歳、SME 従業員、住居建築物取り扱い

2.4 その他の影響と時間に伴う変化

何年にもわたり石綿に関係した仕事の危険がより広く知られるようになってきた一方、数多くの世代が建築およびメンテナンス業を経てきた。これらの異なる世代は、石綿がある環境での仕事に対して、非常に異なる見解を持っている。しかしながら、安全な作業と危険な作業の分け方は年齢だけに関係しているわけではない。これら異なる世代の態度や行動の間には、年上の作業者がその知識を利用して年下の人々を訓練することを含め、複雑な相互作用がある。したがって誤解が世代から次世代へと伝わってしまうことがあり得る、それとは対照的に、年上の作業者たちは、より多くの情報が入手可能になるにつれ、自分のこの問題に関する理解がいかに改善されたか評価することができる場合が多い。

2.4.1 「安全」習慣の変化

安全な習慣が何を要するかということに関して未だに混乱がある一方、多くの作業者たちは、自分たちの仕事とその産業や業種の両方における、石綿をめぐる習慣の変化に気づいていた。彼らの意識が高まるにつれ、特に過去の接触レベルを考えると、石綿曝露を避けるために必要な時間の長さに驚いていた。

「ずっと昔、僕が見習いとして働いていた頃、ええっと、今から20年前、・・・とかそんな具合。現場では多くの年とった連中にあうけど、彼らは、石綿のことをおおげさに言うんだ。でも僕たちあなた達くらい若かった頃はそれ(石綿)をのこぎりでバラバラにしたもんだよ、てね。」

電気技師、34歳、SME 従業員、非住居建築物取り扱い

「それにももちろん問題は、僕が見習いだったときとスタッフになってから、何年にもわたって、フェイスマスクとか着けて自分を守るなどの、安全面と言うのはどうやらなかったらしいです。建物の中にはファシラスみたいなものを使ってあって、もちろんそれはこすり取って下塗りをし、再度つや出しをかけますけどね。でも問題は、こすり落とすとき石綿がとても危険だなんて知らなかったし、それを全部吸っちゃうのですよ。明らかに今は近寄りもしない、さわりもしないしその上にペンキを塗ったりもしないですよ。」

塗装工/装飾工、36歳、個人業者、住居建築物取り扱い

多くの作業者たちは、今は仕事に関係する材料について質問する傾向がかってよりも強いとコメントした。何人かは、習慣における変化は主に自分たち自身、および同僚たちが経験に伴う知恵を身につけたことにより、自分たちは今や関連のリスクをより認識するようになっただけでなく、健康問題一般についてより自覚していると感じていた。

「もっと注意深くなり、もっと目を見開いて、他の人々にももっと目を見開いて、もし別のところにおいて誰か俺たちと一緒に仕事している人じゃない人、危なっかしいものを相手に仕事をしている別の下請け業者に会ったら、きっと、自分を大事にしろよ、それ調べてもらえよ、って言うよ。」

その他のメンテナンス、56歳、大企業の従業員、非住居建築物取り扱い

2.4.2 石綿関連疾患が認識を駆り立てる

作業者の多くが気づいたように、石綿に関する仕事の危険に対する認識の上昇は、明らかな石綿関連疾患の一層の流行に非常に密接に結びついていた。本研究に参加した人々のほぼ半数が、石綿関連疾患の影響を受けた人を直接知っていたか、あるいは自らが影響を受けていた。このような個人的な石綿関連疾患の経験、メディアや雇用者を相手取った訴訟をめぐる世評を通じた一般的な認識とは別に、石綿関連疾患の拡大しつつある存在は作業者たちを多様に影響するようであった。それは一部の人々には明らかに関連の危険の深刻さを曝露した。他の人々にはARDに対する一層の認識は、職場での変化の弾みとなった。

何人かの作業者たちは石綿関連疾患に苦しめられる同僚、友人、家族を知っていた。病気の認識、および若いうちの死は感情に訴えるものであり、一般的な健康問題に対する姿勢を含め、しばしば自らの挙動を変える結果となった（たとえば、一人の労働者は同僚たちを石綿含有材料のために失った経験に触発されて喫煙をやめたことを語った。彼は、石綿曝露の指標であり、石綿肺の初期の警告サインである傷跡が肺にあると言われたにもかかわらず、それまで喫煙を止めずにいたのだ）。

「だから僕は、それが徐々に人々の中に忍び込むというのは、今は一般的な認識だと思えます。多かれ少なかれ、今時はみんなそれで死んだ人のことを知っているのですからね。今ではそれは巨大な疫病だしこれからもっと悪くなる・・・徐々に悪くなって行きますよ。」

その他のメンテナンス、63歳、SME 従業員、非住居建築物取り扱い

「石綿は40年以上も前に使いました。60年代の初めです。ダストマスクも配布されなかったし危険の兆しも無く、だからただ仕事をしました。それは私がおじのところでした。店の整備とか郵便局のための仕事や、そんな感じの仕事をしていました。ほとんどは工業的な仕事で、住居関係は少しだけでした。そして3年くらいだと思いますけど、それがわかったのです。胸に炎症が起こって血を吐いたのです。そうしたら彼らが私を病院に行かせて、X線やスキャンをして、そうしたら『石綿肺です』だって。」

その他のメンテナンス、68歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「私はずっとヒーター産業で働いてきましたし、被覆材はずっと身近なものでした。今働いているところに来たら、炉の中は、配管は全て鉛と石綿でした。それに私が働いたことのある所では炉は全て内側が覆われていました。1984年には同僚が一人亡くなりました。石綿のせいということにはなりませんでしたがね、何か別のものが原因ということにな

りました。でも私たちは・・・いずれにせよ私達はキャンペーンをやって、90 パーセントの石綿を除去してもらいましたよ。」

整備工、59 歳、大企業の従業員、非住居建築物取り扱い

「そこから見える木、その木と二つの木々の集まりとの間の空間、見えますか？ 根っこが一本突き出ているでしょう、あれが（名前）の木なのです。彼が 57 歳のとき埋めてやらなくちゃならなかったのです。たった 57 歳のときがんで死んだのですよ。石綿肺でした・・・。それから別の人がいた。彼はここを去ってからたった 1 年しかもたなかった、死んだんですよ、わかるでしょう、彼がもう一人の人だったんです。ここでは数人それで倒れた・・・石綿肺ですよ。」

電気技師、56 歳、大企業従業員、非住居建築物取り扱い

数多くの作業員たちが、石綿と結びついた危険を再評価し、労働習慣を変え始めたきっかけとして石綿関連疾患（ARD）の経験に言及した。数人の労働者たちは、職場を通して受けていた石綿トレーニングと偶然同じ時に、ARD の経験をした。石綿の影響の深刻さを、心の最先端で感じたと言うことは、安全のメッセージを吸収しやすくしたようである。

「石綿の可能性のあるものに出会うといつも、話したように家族の一人が実は重病で、実際これで死んだので、とにかくそこを辞めてしまいます。」

その他のメンテナンス、30 歳、SME 従業員、住居および非住居建築物を取り扱う

「私にとっては、個人的なことなのですが、おじが石綿肺で亡くなり、ひどく苦しんで死んだのを見たんです。もちこたえるために点滴をたくさん受けていました。それは・・・島でのことで、かつてそこには（地名）という石綿がたくさんある現場がありました。彼は電気技師で、実際には石綿関係の仕事ではなかったのです。でも石綿は空気中に飛んでいて、それは彼を拾ってしまったんです。友達をとりあげたのです。だからそれには、『それが何をするかを見た』という要素があるんです。」

大工/指物師、54 歳、個人業者、住居、非住居建築物両方の取り扱い

2.4.3 「私にとっては手遅れ」

石綿関連疾患が同僚や友人に影響を及ぼしたという経験を持つ人たちの多くは、より年配の作業員であった。しかしながら、このグループには他の影響もあった。

ARD の自分が知っている人々への影響を直接経験することで、自分の健康を守るための前向きなステップを踏むようになることがある一方、自分たちの曝露に「不可避性」があるという意味で、その経験は悪い方に働いてしまうこともあり得る。

建設/メンテナンスの分野で何年も仕事をしてきたより年配の作業員たちは、石綿がまだ比較的新しい材料であった頃に頻繁にそれに接触しており、それゆえかつて高レベルの石綿にさらされた事実

について論ずることができた。その結果、発展しつつある石綿関連疾患（ARD）の危険から身を守るには、いまやもう手遅れだとすっかり信じ込んでいる人々がいた。このグループの人々は今でもさらに石綿に接触することを避けるよう心がけているが、現在の仕事での低レベルの曝露はかなり我慢してしまうようである。さらに、本調査に参加した人々の多くは、自身が石綿関連疾患（ARD）であると診断されたことがあり、そのことが自分のリスクへの忍耐力の解釈に影響を及ぼした。

「年とった世代というのは、私たちだって今はその（石綿の）ことは心配だけど、若い連中がやらないだろうなと思うところで、は今でも危険を冒すかもしれない。前に仕事でそれに関係したことがあるから、何と言うか、たぶんちょっと怠慢になっていて、前に仕事でそれに接したことがあるからまた何とか免れる、と思うかもしれない。免れないけどね。そして今時の若いものっていうのは、連中はカレッジでそれについて習うから、それに全く手を出そうともしない。私達はやるかもしれないけれどね。」

整備工、64歳、大企業の従業員、非住居建築物取り扱い

「私はこのタンクのある産業地区で毎日それ（石綿）に接していますが、危険じゃないですよ。振り返ると、危険があったのは、それを全部吸い込んでいたころのことです。製粉所だったのですが、でもずっと前のことですよ、40年以上前です。」

配管工/ヒーター技師、60歳、住居、非住居建築物両方の取り扱い

「私の年齢層の人達は白石綿のことは全然真剣に考えないですよ。だっていままでさらされてきたのですから。さらされてきたのなら、もう影響を受けていますよ。心配してどうするんですか？」

その他のメンテナンス、53歳、個人業者、住居建築物取り扱い

これらの労働者たちの態度は非常にかたくなな様子であり、そのキャリアの初期に高レベルの石綿にさらされた人々にメッセージを理解させるのは難しいかもしれない。しかしながら、「私にとっては手遅れ」だから危険な行為を我慢するという立場を採るのは、自らの健康においては正当化が可能に見えるかもしれないが、彼らと仕事をする他の人々にも暗示するものが確かにある。

「僕が、『触らないからね』、と言うと彼は、『へえ・・・大丈夫だよ』と言うのです。彼はとにかくハンマーで叩いて取り外し続け、それをバンの後ろに放り込んだのです。」

配管工/ヒーティング技師、22歳、個人業者、住居建築物取り扱い

ある意味では、石綿に関する警告は、この『曝露』グループに非常に効果的に伝わったため、今や彼らは新たなリスクを管理する試みに少しも意味を見出さないのだ。それはどうやら影響力のある、危険や危険管理行動に関する詳細な情報を欠く、比較的単純なメッセージのためかもしれない（この章の初めに概要が述べてある）。そこには意固地になった喫煙者の態度と似たものがある。彼らは、ダメージはすでにもうなされてしまったのであり、もう元には戻れないという認識で、その習

慣を続けることを合理化するのである。このことは、将来このグループとどのようにコミュニケーションをとるのが最善かという問題を示唆する。メッセージは、例えば、彼らの同僚やその他の現場にいる人々への危険を強調すべきだろうか、それとも彼らが接する可能性のある危険を強調すべきだろうか？ または、重要な事実をはっきりと説明し、危険なレベルの曝露をすでに経験した可能性があると考えられる人々を対象とした、特定のメッセージは、このグループ内での安全行為を促進するために貴重な道具となるかもしれない。これらの年配の作業者に影響を与えることは、その一般的な影響力のため、より広く人々の行動に影響を与えるための主な手段となる可能性がある。このことについては次に議論する。

2.4.4 年配の作業者は大きな影響力を持つ

本研究における作業者たちのほぼ全ては職場で、または同僚から技術や知識を学んだかということについて述べた。年上の同僚は特に貴重な指導源と見なされていた。しかしながら、年上の同僚の労働習慣は今日の考え方からは逸している可能性があると感じている作業者たちもいた。石綿の危険を認識しているにもかかわらず、同僚の危険な労働習慣から自分の身を守るのは困難であると感じる年下の同僚たちもいた。

「何年も前、十年位前にある配管工と家の中で仕事をしたことを覚えているのですが、彼は何かを取り出して、『あのヒーターには石綿が入っているんじゃないか』と言ったんです。ボイラーみたいなものとガスケットとだか何だかがありましたからね。それで彼はそれを分解しながら言ったのです、『僕はこんなもの気にしないよ』と。僕はそれはちょっと投げやりな態度だと思いました。」

塗装工/装飾工、35歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「これは今のことで年上の人達と仕事をする時のことですが、彼らは、ああ、石綿だ、と言うだけで誰も気にしない様子ですよ。もし現場に石綿とかがあったら僕らはただ、端によけたり・・・何とかするのです。」

その他のメンテナンス、29歳、個人企業、住居建築物取り扱い

若年の作業者たちこのような古臭い態度に気づいているものの、年上の作業者の採るアプローチが、彼らが石綿の危険性を評価する仕方に影響を及ぼしていることも明らかであった。このような場合年上の作業者たちの習慣は、石綿がまだ安全で便利な材料だと思われていたずっと以前の経験から得た情報によるものであることが多かった。若年の作業者の中には、健康で元気そうな年配の同僚の経験を聞き、たとえ微量でもそれを吸入すると致死的であると主張する、石綿警告の妥当性を疑問視する人もいた。

「充分考えたのですが、その危険って本当なのだから、それともただ・・・明らかにその危険はどのくらい重大なのか考えさせられますよ。だって彼の人生の間ずっとそれが彼の姿勢なのですから、一日中これを扱って来て、いや、一日中じゃなくて、とにかく僕よりも頻

繁に扱って、彼は全く害を受けていない様子ですからね。」

配管工/ヒーティング技師、22歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「カレッジにある男がいて、彼は以前毎日それ（石綿）に関して仕事をしていて、顔は石綿だらけだって言っていましたよ。そして古い配水管に石綿のロープを使わなくてはならなくて、こんなふうに包んで、しかも目の前で。彼が言うには、それはそれ（石綿）ですっかり覆われているのだということでした。でも彼は今でも元気ですよ！」

配管工/ヒーティング技師、22歳、個人業者、住居建築物取り扱い

全体的に見て、年配の作業者はその業界において若年の作業者にとって有力なお手本の役割を演じることは明らかである。しかしそのことは、必ずしも彼らが正しい情報を伝え、安全な行動を促進するということを意味するわけではない。石綿関連疾患の経験や石綿の危険の警告メッセージに強く影響され、石綿の危険の処置に対するアプローチがより慎重な傾向のある年配の作業者は、次世代の労働者たちにとってはポジティブな例となった。残念ながら、仕事で石綿に関するに際して、危険なやり方で自己の健康への危険をあえて耐える姿勢の年配の作業者は、他の人の危険な行動までも促してしまうのである。しかしながら明らかなのは、年配の作業者は同僚の信頼や尊敬を受けているということである。安全行為についてのメッセージを伝えるために、この役割をいかにして最高に利用するかは決定が難しいが、それは有用なコミュニケーション手段となるかもしれない。

2.5 主な問題点

2.5.1 石綿に関するトレーニングと情報

相当数の回答者がその職歴のうち正式な石綿トレーニング（特定のなものにせよ、または健康安全モジュールの基礎的な話題にせよ）に参加したことがある一方、ほとんどの人々はその石綿の知識を職業経験、または同僚や家族の持つ知識を通して形成した。その結果、作業者たちは石綿に関する入り混じったメッセージの影響を受けた。回答者のほぼ全員は、触れてはいけない、仕事場で用いてはいけないというはっきりとしたメッセージと共に、石綿は危険な材料であるという一般的なメッセージにも気づいていた。しかし、彼らの知識は石綿の識別や実際に扱いということになると非常に限られていた。

以下の点も要約するに値する：

- 回答者の受けたトレーニングは1992年以前のものであった。
- 最も一般的にはここの人々は何らかの正式なトレーニングを受けているが、それは友人や同僚、非公式な、実務における経験を通して補足されている。
- 相当数の異なる、信頼度のレベルも異なる情報源が用いられている。
- 安全習慣を形成するものに関する知識、およびそれを支援する情報が時と共に、そして何人かの年配の労働者の経歴と共に変化した。

これら全てが、入り混じったメッセージおよび誤った情報、そして知識、姿勢、行動の一貫性の欠如の原因となる。

2.5.2 実際に石綿を扱う

情報が入手可能であるにも関わらず、多くの回答者は仕事中に石綿を見つけ、識別する自らの能力に対する自信や、石綿を含む可能性のある材料の範囲についての認識に欠けていた。

さらに、石綿が見分けられたかもしれないという段になって、採るべき特定の手順について自信のあるものはほとんどいなかった（例えば、何をすべきか、誰に知らせるべきか、どのようにテストするかなど）。

このことは、危険の見出し方、また見出したときにすべきことに関する知識のなさや結びつき、石綿一般に対するかなりの程度の不安のある状況へと向かって行った。心理学的に言えば、これは個々人にとっては耐え難い心地の悪い状態である。高まる不安と石綿をどのように使うべきかという特定の知識の欠如を前に、個々の人々は不安を減少させるような情報源に、たとえそれが充分信頼できるものではないと知っていても、耳を傾け、または信頼する傾向があるのだ。

同僚や雇用者の影響もまた、作業員たちがいかに石綿のメッセージを自分たちの仕事に組み込むか、ということにおいて重要な因子であった。年配の作業員たちはしばしば若年の作業員たちの有力なお手本であった。しかしながら、それは必ずしもよい結果をもたらすようなものではなかった。石綿曝露から自らを守るにはもう手遅れだと感じる年配の作業員は、自身や他の人々を危険にさらす可能性があるからだ。中には、石綿の危険を軽視し、石綿に関する安全メッセージの信頼性を損なうものもいるのだ。しかしながら大部分において、また彼らが石綿に関する安全メッセージを議論する場合、年配の作業員はその職場において、石綿の認識と安全においては他の人に勝る力を発揮する可能性がある。

第3章. 石綿の危険に対する姿勢

「それが正直なことだとは思いませんでしたよ。つまり正直に言うと、年とるにつれてこれ（石綿）のことを聞くようになり、それに私の昔の理事がこれで亡くなったのですよ、造船所とかにいた頃からの石綿関係の病気で。でも、私、そのことはあまり考えないんです。」

配管工/ヒーティング技師、57歳、個人業者、住居建築物取り扱い

大多数の作業者は石綿が危険な材料であるということを知っているとすると、次のステップは彼らがいかにこの知識を自らの状況に関係付けるかということを理解することである。石綿をめぐる個々の人々がいかに行動するかということの重要な部分は、自らの健康に対するより一般的な意味の危険ではなく、相対的リスクに対する理解である。この章では作業員たち自身による石綿が引き起こす危険の評価を探究し、さらに彼らがこれらの危険から自らを護ることができると感じている程度に注目する。さらにこの章では、なぜ時折仕事で石綿に接触すること、または何らかの形態で石綿にさらされることがあるのか、ということに対する作業員たちの説明を考察する。自分たちの行動の理由付けは、作業員たちがどの程度真剣に自らの健康への危険を受け止めているかということを理解するために、また行動を変化させるに際して障害となるものを克服するためにどのようなアプローチが最も有効であるかということを知るために有用である。

「低レベル」の曝露と理解されているものに対しては確かに、ある程度我慢する傾向が見られる。さらに、石綿曝露が引き起こす危険は、作業員たちが直面する多くの危険のうちの一つに過ぎないと見なされている。石綿の危険は、曝露の影響を免れる人がいるなど（つまり喫煙者のように）、しばしば無作為の要素があると見なされており、安全指針は実際に施行するには金がかかりすぎる、または時間がかかりすぎると見なされる可能性がある。

3.1 作業員たちによる石綿の危険評価

石綿を含む材料には膨大な種類がある。これらの中には、損壊により繊維を放出する傾向がより強いために、ハイリスク材料と見なされているものがある（第1章はこれに関してより詳細な概観について述べている）。しかしながら、石綿含有材料に関しては、材料そのものの性質が重要な一方、それが職場にどのくらいあるかということや、おそらくより大切なことだが、その状態も重要である。

しかしながら個々の人が度適切な行動を採ることができる程度、そうする気持ちの程度は、様々な因子により促される。これらについてはこの章の残りの部分で論じる。

3.1.1 心配するほど石綿があるはずがない

異なる石綿含有材料（ACM）を扱う際の相対的安全性についてしばしば混乱が見られた。多くの労働者たちが、ある種の「低級」の材料は、たとえあったとしてもほとんど危険を引き起こさないと信じきっていた。それにより後に彼らが避けるタイプと、彼らが安全と思うタイプとが性格づけられた。さらに、危険と認識されている石綿の量に関して、不明瞭さが広まっていた。いまひとつの思い込みは、ほとんどの石綿がすでに取り除かれており、したがって健康に対する脅威ではないということであった。その結果は、ほんの少し残っている石綿は比較的安全であると見る姿勢であった。少数の作業者たちは、石綿は禁止されたのだからそれはもはや危険ではない、と言う印象を受けていた。

「僕が仕事をしてきた間、有害な石綿を私は2回しか見ていないです。ずっと長いこと仕事をしてきて、屋根にも家の中の被覆材にも、低級のもの以外はめったに見たことがないですよ。僕が言うこと、わかりますか？ 見ることはないですよ、お目にかかることはほとんど無い、無いです。」

配管工/ヒーティング技師、22歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「私が仕事をしている現場と、多くの現場はたいして危険じゃないですよ。ほとんど除去されましたからね。何パーセントかはわからないけど、これまでに除去されたと思っただのは、75%位じゃないかと思うけどね。」

その他のメンテナンス、69歳、大企業の従業員、非住居建築物取り扱い

石綿関連疾患の影響を受けた人々は大量の石綿にさらされていたと、一般的に信じられていた。造船所、海軍との仕事、石綿の被覆材関係の作業が、石綿関連疾患と関連した極端な曝露レベルの例として頻繁に引用された。この見解は、石綿関連疾患を患った労働者が就いていた職業と一致するが、石綿関連疾患の発病はこれらの職業だけに限られてはいない。危険性の高い職業がイギリス経済から大方において消え去ったと仮定すると（石綿製造業など）、現在もっとも危険に瀕しているグループは、建設およびメンテナンス業にいる人々である。危険なのは、この見解（石綿関連疾患）は数種のハイリスクの職業に関連付けられるが、石綿板をドリルで穴あけをしたり、石綿波形シートを除去したりする作業は、比較的危険が無いという思い違いに導く可能性があるということである。確かにインタビューを受けた人々のうち何人かは、この見解を持っていたか、またはこの見解を持つ同僚を知っていた。

3.1.2 あるレベルの石綿は「安全」と見なされている

何が危険な曝露を成すのかという事について明確さに欠けるため、このように考える人がいる。「一本の繊維が命取り」というメッセージはかなり多くの回答者が話題にした。しかし、それは必ずしも良いことではない。ある人々にはこのメッセージは非常に極端、または不安をかき立てるものなので、彼らはこれを無視しがちであり、少しも有用ではない情報を基にし、受け入れ可能なリスク

を成すものの評価を自分で行うのである。度が過ぎたり、偏執狂のように見えたりすること無く自分たちを石綿曝露から保護するため、正しいバランスを必死で探し出そうとしていた作業者がいたことは明らかである。

「だから、そうだね、世の中には知識はたくさんあると思うよ。トレーニングもきっとたくさんあるよ。でも、人々が一本の繊維が命取りになると思っているとは思わないし、ドリルをかけたって大丈夫だと思っているみたいだし、それで仕事の一部が片付くわけですよ。」

配管工/ヒーティング技師、30歳、個人業者、住居建築物

「どんな仕事だってやりすぎちゃうことってあるでしょ。それで大きな・・・言っていることわかるかな。ドリルで穴をあけると、壁の向こうに何があるか、わかりっこないよね。でも、つまり僕はたいして危険のことは考えないよ。街中の方がひどいと思うよ、何か飛び回っているから。どうだろうね。」

配管工/ヒーティング技師、57歳、個人業者、住居建築業者

作業員たちにありがちだった、石綿の危険性の合理的な説明の一つは、石綿は一般的に空気中に存在し、全ての人々は曝露の危険にさらされている、というものだ。地下鉄に乗ることから、車通りのそばに立つことまで、曝露の例が引き合いに出された。この「一般化した危険性」はしばしば、少量の石綿は危険ではないという見解と関係していた。

「一番重大な危険性は、肺が完全にそれで一杯になってしまう石綿肺です。でもそれは産業や建材、車のブレーキのライニングに使われてきたから、一般的に空気中に存在するのです。だから車通りの激しい通りに立っていたら、たぶん少しは吸い込んでしまうんですよ。」

塗装工/装飾工、35歳、個人業者、住居建築物取り扱い

土壌、水、空気中には、天然と人工の両発生源からの、無視可能な程度の石綿が存在する。しかしながら、地方での石綿の空気中の濃度は、大都市の10分の1くらいだが、大都市の濃度も今日の石綿関連の仕事で受け入れられている濃度の1000分の1ほどである。これほど曝露レベルが低ければ、環境的な危険性は無視できる。

3.1.3 新材料はより目に付く

相当数の作業員たちが、市場に出回っている「新しい石綿」となるかもしれない、またはすでにある新しい製品について語った。人の健康への影響が知られるまで、石綿は非常に広く用いられていたということを知り、多くの人達はその他の現在の新しい製品も長期的には同じような影響を持つ可能性を意識するようになった。MDFのような製品は、粉じんを大量に出すいかなる材料とも同様に、石綿と同じような危険性があると見なされることがあった。これらの材料と石綿の違

いは、多くの労働者が石綿はもはや彼らに影響を及ぼすほどの量は存在しないと信じる一方、彼らはこれらの材料は未だに現場で用いられていることを知っているということであった。

石綿の危険は長い間知られていなかったが今はより理解されていると言う事実は、これから長期にわたって観察される新しい製品こそが最大のリスクを引き起こすということを暗示するのだ、と考える人がいた。これらのような懸念は石綿曝露の危険性の認識を希薄にしてしまう可能性があるが、(第6章に論じるように) 空気中の繊維や化学物質の存在が、石綿の危険だけでは用いられなかったであろう個人保護具 (PPE) の使用を促進しているという証拠もいくらかある。

「だって、60年代や70年代は石綿に対する認識がなかったでしょう？ 今はMDFだって同じことですよ。MDFは命取りかもしれないけれど、家の改造にこれがたくさん使われているのをテレビで見るでしょう。それに彼らはこれを使うように薦め、それ、ガラス繊維、をたくさん使って、それで……。ロフトに上がってそれを剥ぎ取ろうとして……。いくらマスクをしたって、後で肺がどんな状態になっているか考えても見てくださいよ。私が言うように、前は認識されてなかった、90年代になってやっとみんな石綿を認識するようになったのですよ。」

その他のメンテナンス、63歳、SME従業員、非住居建築物取り扱い

「私にとって石綿はリスクですよ。でも新しい石綿はガラス繊維だそうですね。石綿のことは少しばかり知っているけど、それはもう古臭いのかな、みんな他のものを使うようになったのかな？これは将来私にとって、まだ注目されていないけれど石綿の危険の一つとなるようなリスクになるんですかね。」

電気技師、43歳、大企業従業員、住居建築物取り扱い

3.1.4 その他のリスクの方が重要

いま一つの因子は、建設およびメンテナンス業界の作業員たちは自分たちは「危険に満ちた」産業界で仕事をしているという認識をすでにもっているということである。この認識は事実に基づいている。労働者の死亡者数のうち3分の1は建設業のものであり、またこの部門の労働日損失の割合は平均以上である¹³。しかしながら建設業界では焦点は健康リスクよりも安全に絞られている。近頃の建設業界雇用者および個人業者に関する調査によると、回答者の50%が高所を主な危険性としているのに対し、粉じんやガスの吸入が危険であると答えたのはたった23%であった¹⁴。

作業員たちは、職場においてどの程度真剣に石綿が他の健康および安全リスクに関係しているかと考えるかという質問を受けた。多くが石綿は最も深刻なリスクの一つであると考えていたが、共通して墜落、電気、塵芥、鋸、およびその他の電動器具が石綿より深刻な危険を引き起こすと感じられ

¹³ ONS (2004), 建設業界における職業病: 統計ファクトシート, HSE 出版

¹⁴ タイヤーズ・C, シンクレア・A, よりよい健康を作るために: 雇用者ベースライン調査報告, HSE 出版

ていた。この認識は三つの主な因子によって駆り立てるものであると見受けられる：

1. 石綿関連疾患の長い潜伏期間とは異なり、即時的な危険による損傷
2. 石綿の「隠れた」性質と比べると、視覚的に明らかな危険
3. 石綿曝露は頻繁ではないと認識されているのとは対照的に、ある種の危険は個々の人々が比較的頻繁にさらされている

「たぶん僕には普通の埃ほどにも気にならないですよ。だって明らかに誇りは毎日のことだけど、石綿は最小限ですからね。」

配管工/ヒーティング技師、22歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「鋸を使っていたとして、もし指を切っちゃったらそれだけのこと。それは治すことができるけど、石綿の場合は命を失ってしまう。でも高所で仕事をしていてもし落ちたら、死んでしまうかもしれない。私にとってこれらは全部同等ですよ。」

大工/指物師、42歳、個人業者、住居、非住居両方を取り扱う

「高所からの墜落、私はあんまり・・・いや、時々のはしごを上りますし、たぶんもしはしごから落ちたら、そう、怪我をするでしょうね。もう仕事ができなくなるかもしれない。一方石綿は、表に出るまでどう危険なのかわからないですよ。だからはしごを上って落ちる危険は明らかだしあたっの危険ですよ。でも石綿は潜在的な脅威であって、扱い方によってはそんなに危険ではないかもしれない。」

大工/指物師、49歳、個人業者、住居建築物取り扱い

3.1.5 ある程度リスクは「不可避」

作業員の中には石綿が引き起こす危険を全く真剣に受け止めていない人がいるのは明らかであった。これらの個人たちはしばしば石綿を一般的な喫煙や、がんの進行にたとえた。石綿が危険であると認める一方、彼らはその仕事には危険が多すぎて完全な労働環境などありえないと感じていた。

「タバコを吸うのも危険、全ては危険、人生は危険。セメントみたいなもので仕事をしていて、風が吹いているときにそれをミキサーに入れようとする、それは顔の周りを飛び回っているんです。建築業界には何百もの危険があるんですよ。」

その他のメンテナンス、59歳、SME 従業員、非住居建築物取り扱い

「それが大きなリスクだとは全然思いませんね。トレーニングではそれが大きなリスクだと教えることを知っていても、個人的にはタバコを吸ってがんになるのと同じ部類に入れます、つまりそれと同じようなレベルです。建築現場にいる間はそれのことを考えません。心配しなくちゃならないもっと多くのことがあるんです。」